



ガバナーメッセージ 一年間を振り返って

国際ロータリー第2660地区 ガバナー 簡 仁一
(英木RC)



2020-21年度のガバナーの任を無事、終えることができました。コロナ禍という厳しい状況乗り越えることができたのは、お世話になったすべてのロータリアン、ロータリーファミリーの皆さまのおかげです。心より感謝を申し上げます。

7月17日に始まり、12月24日で終えた公式訪問では、地区内80クラブを訪問させていただきました。例会前の会長・幹事・理事役員の皆さまとの懇談会では、それぞれのクラブの現状をお聞きしました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、例会を休会としなくてはならない状況や、会員数の減少といった課題を抱えながらも、クラブの個性を生かした活動を模索する皆さまの熱意を実感する貴重な時間となりました。

12月12日の地区大会は、無観客で本会議のみを実施し、大阪国際会議場からライブ配信をさせていただきました。2年以上をかけて準備にあたってきた計画のほとんどが実現されず、また、ロータリアンが一堂に会することもできなかったものの、多くの皆さまのお力をいただいて、開催が実現し、配信というスタイルではあっても、心と心が確かに通じるのだと気づく機会となりました。

IMロータリーデーなどの実施もかないませんでした。こうした時こそ、ロータリーとして何ができるのかを、すべてのロータリアンとともに考えようという思いから、「ロータリー希望の扉プロジェクト」を発足させることができました。

2020-21年度のRI会長、ホルガー・クナーク氏のテーマ「ロータリーは機会の扉を開く」にならって、ロータリー活動が制限される状況下においても、様々な「希望の扉」を開けることができるのではないか、と呼びかけようと考えたのです。

新型コロナウイルス感染症が拡大する現状を、どのような視点で見つめ、分析するのか、コロナ後の社会についていかに思いをめぐらせるのか、といったテーマで、専門家に語ってもらうオンライン講演会を5、6月の計2回開催するとともに、コロナ禍で生活に困窮している外国人留学生らに、炊飯器や白米など食料を贈るなど、クラブそれぞれが工夫を凝らし、様々な支援をしてくださいました。

「できないこと」を嘆くのではなく、皆で、自由に意見を交わし、知恵を出し合って工夫を重ねることで、「できること」を見だし、希望を抱いて進む。そうした姿勢を学んだ1年でした。

ロータリアンだった父が好きだった言葉に、武者小路実篤の「君は君 我は我也 されど仲良き」があります。コロナ禍の収束はまだ見えませんが、だからこそ、個性豊かで多様な視点を持つロータリアン、ロータリーファミリーとの絆に恵まれた幸せをかみしめつつ、今後も、各クラブがさらに充実した活動に取り組み、発展されることを心から願っております。

1年間、本当にありがとうございました。